

福建沿海部の近代化と伝統文化の変容

— 莆仙戯の復興を中心に —

加治 敏之

はじめに

経済開発と物質文明の普及は、一般に社会の近代化を促し伝統文化の破壊や衰退をもたらすと思われがちだが、福建沿海部では近代化と伝統文化が排他せずに共存する現象も見られる。この地域では1980年代以降の経済開発と同時に、復興の傾向にある文化・社会的伝統も観察される。漢族の古来からの社会構造である宗族組織の復興¹⁾を中心に、それに関わる祭祀・芸能や様々な宗教信仰が復活し、この現象は今も福建沿海部で進行中である。

本稿では、この地域における社会構造の柔軟さと文化の重層性に着目し、特に莆田地方に伝わる莆仙戯という演劇活動の観察を通じて、近代化と伝統文化の変容の意味について考察していく。これは今日の中国人社会が置かれている混沌とした文化状況にあって、文化の共生がどのように実現するかについて、分析の端緒となることを企図したものである。

地域の紹介（福州から潮州まで）

福建省から広東省東部の沿海地方には代表的な都市として、北から福州、泉州、廈門（および漳州）、汕頭（および潮州）がある。福州から潮州までのこの地域は、上海周辺地域や広州を中心とする珠江デルタ地域と並び経済特区を中心に、1980年代以降順調な経済成長を果たしてきた。経済成長には以前から緊密であった華僑を通じて香港や東南アジアとの関係が寄与しており、また現在では台湾との経済的・文化的交流も強まっている。

福州は福建省の省都であり、地域の政治的中心であり続けた。泉州は歴史的な貿易港で、宋元時代に最も栄えた。廈門は内陸にある漳州の外港として近代以降の経済発展がめざましい。汕頭は潮州の外港として広東省東部の経済中心地である。（汕頭・潮州は、行政的には広東省に属するが、歴史的・文化的に廈門、泉州の影響が強く、閩南文化圏と見なされている。）

1) 近年この地域で宗族が復興の機運にあることを明らかにした代表的研究として、潘宏立氏の『現代東南中国の漢族社会』がある。泉州付近の宗族について行った人類学的調査の報告と、それに基づいて東南中国で宗族が復興の機運にあることを論じたものである。

福州から廈門までは高速道路が開通していて、これらの諸地域はそれぞれ100～200km前後離れている。(山陽道にあてはめると、およそ大阪、岡山、尾道、下関ほどの位置関係になるうか。)

この地域は文化的な共通性が高く、また福建省で最も経済開発が進んでいる地帯でもある。同時に、中華人民共和国では宗教信仰活動や宗族の復興がきわめて盛んである。文革後かなり早くから寺廟が再建・改修され、1990年代に入るとその傾向は村落の小廟にまで及んでいる。詳しくは後述するが、華僑の故郷である「僑郷」が多く、この華僑との関わりが、経済開発の一方で伝統文化の維持・復興の大きな要因であると推察される。

莆田とその伝統

上記の諸都市は日本でもなじみ深いが、本稿で紹介する莆田についてはあまり知られていないので、文化的伝統を中心に取り上げておく。

莆田は福州と泉州のほぼ中間（それぞれ100kmほど離れている）にあり、都市の規模としては上述の4都市よりやや小さい。

莆田市（市は日本では県に相当する）は面積が4060平方kmで、岡山県の半分程度の広さである。人口は約300万人で、岡山県の1.5倍である。福建沿海部でも極めて人口密度が高い。莆田地区と仙遊地区からなり、莆仙語という独特の言語を用いる文化圏としてまとまっている。莆田地区の人口が全体の3分の2、仙遊地区が3分の1であり、面積はほぼ1対1である。中心都市部、莆田（市区）の人口は35万人前後である。

かつては興化と称したこの町は、泉州や漳州同様、宋代から繁栄を重ね一六世紀中葉には倭寇による大規模な襲撃を受けている。清末以後、莆田からも多くの移民が華僑として東南アジアに渡った。現在も住民の多くは華僑の家族や親戚をもち、東南アジア諸国との人的・経済的交流が盛んである。多くの華僑を送り出し、華僑にとっては父祖の出身地であり、現在も頻繁に往来のある地域を「僑郷」と呼ぶが、莆田は福建省でも有名な僑郷の一つである。

莆田固有の伝統としては、商業と教育の分野が突出している。一般に福建人は商業活動を重んじ教育にも熱心に投資する傾向があるが、莆田人の商業活動のしたたかさは周囲から畏怖と羨望の混じった評価を受け、また科挙の時代から現在の大学入試に至るまで成績優秀者を輩出する教育熱心な気風がある。

宗教信仰も、儒仏道の三教をはじめ民間信仰に至るまで極めて活発である。歴史的に有名な寺院も多く、城隍廟や村落の小廟・宗族の祠堂に至るまで、多くの宗教施設が再建され信者の参詣も増えている。代表的なものとしては、仏教の古刹として莆田市郊外の広化寺が多くの修行僧を集めている。海路の安全をつかさどる媽祖信仰の本山が湄洲島にあり祭礼の日には台湾などから

多数の参詣客が訪れる。莆田の人・林兆恩によって明末に開かれた民間宗教である三一教も、この地区を中心に教勢を回復している。

莆仙地区の伝統文化で最も個性的なものは、莆仙戯である。莆仙戯とは莆田・仙遊地区の劇という意味で、千年前後の古い歴史があるといわれ、1954年以前は興化戯と呼ばれた。現地では単に廟戯とも呼ばれ、道観や宗族の祠堂の正面にある戯台で上演される。専門劇場はなく野外劇で、神前に奉納する祭祀演劇から発生しており、伝統的な形態を保持した宗族の活動とも密接に結びついている。辛亥革命から文化大革命まで衰退の一途を辿ったが、現在はある意味で「復興」の途上にあり、他地域と比べてきわだって旺盛な活動がみられる。

このように伝統文化が維持・復興の趨勢にあることは、福建沿海部から広東省東部の潮州にまで共通することであるが、以下その背景について考察していく。

僑郷の近代化と宗族の再興

莆田を含む福州から潮州までの地域では、経済開発による社会の近代化が伝統文化の衰退をもたらすのではなく、宗族の活動や伝統文化のある部分は再興の傾向にある。その背景には、1980年代以降の改革開放政策の実施により、国家権力が宗教信仰や宗族の活動についてある程度の自由を認めたことと、華僑の存在（この地域が僑郷であること）によるところが大きい。

中華人民共和国が成立すると宗族は封建的制度として批判され、とりわけ文化大革命期に農村の人民公社化が徹底されたことで、大陸の宗族は活動を断絶してしまった。文革終息後、人民公社の廃止などによって村落に対する行政の直接統治がゆらぎ、地域の紛争調停などは自治の伝統と経験のある宗族の長老たちの力量が求められた²⁾。また地方自治や私有財産の保有・信仰の自由などが容認されつつあることも、宗族の再興にとっての追い風となっている。

もう一つの変化は、華僑との経済交流の緊密化である。1980年代以降、僑郷が比較的短期間に経済成長を成し遂げられたのは、背後に人的ネットワークという資産があったからである。すなわち華僑による援助や投資、ノウハウの伝授等が、内陸部などより先にまずなされたためである。華僑が投資先として祖先の地を選ぶ傾向にあるのは、言語・習慣の共通性に加えて、相互の信頼感といった精神的な一体感によるところが大きい。インフラや華僑向けのホテル等の整備、経済的優遇など行政が行いいう誘導策も必要であるが、華僑の「郷愁」に訴えその経済力を引き出すために、彼らが心地よく頻繁に帰って来られるような祖地の精神的整備、言い換えれば宗族の絆と祖地のもつ力による一体感の確認は、この地では極めて重視されている。この経緯は、潘

2) 潘宏立『現代東南中国の漢族社会』第3章第3節「老人会—現代における宗族の再興」を参照。宗族の長老の集まりは、装いを老人会と変えながらも合法化され持続している。

宏立氏の調査報告にも具体的に示されている³⁾。

潘氏の研究は、泉州郊外の石獅市における蔡姓の宗族が、この十数年でどのようにその組織や施設などを再生させてきたかを明らかにしたもので、その規模の大きさと復元力の強さにおいて、泉州地区における宗族再興の典型的な事例といえる。筆者も莆田において、同様に多くの宗族が復活し活動を再開してきていることを観察している。具体的には、莆田でも祖先祭祀に関わる儀礼の復活、墳墓の整備、祠堂の修築や族譜の再編等の行為が、1980年代以降かなり一般的に行われてきている。ただ、すべての宗族が普通の復元を果たしているわけではなく、またそれを企図している訳ではない。例えば、族長に権力を集中させたり、族田による義捐金や奨学金の確保などは、時代の変化の中で大きく制限されている。宗族の紐帯を確認するために族譜の再編などは果たしたが、祠堂の再建は果たせないというように、結集力の弱い宗族も多い。莆田においても宗族再興のあり方は、それぞれの集団の置かれた状況に合わせて、多様な形態をとっているようである。

このように近代化の進行と同時に宗族の再興がなされることについて、この地域では比較的自然なものと受けとめられているが、他省（主に北方）の中国人は非常に奇妙なものに感じているようである。経済的に近代化を成し遂げたのに、その富を「封建迷信」すなわち祖先祭祀や祠堂・墳墓の建設等に浪費しているのは理解できない、というのである。政府の公式見解も同様で、例えば火葬や爆竹などには徐々に制限が加えられ、盂蘭盆などの供養で紙銭を焼くなどの行為は迷信として批判される場合がある。とはいえ今のところ、福建省のとりわけ農村部では宗族の伝統的活動はかなり許容されている感がある。

宗族と演劇の復興、莆田の場合

莆田では、そのような宗族再興の動きと連動して、廟戲の復興が顕著に見られる。

福建省そのものが地方劇の盛んな地方として有名だが、とりわけ莆仙地区は演劇を好む気風が強い。莆仙戲は中国演劇史では著名な地方劇のひとつで、音楽などに古式をよく残し、隣接地域である泉州の南音や梨園戲とともに「活化石」と呼ばれることもある。宋代の頃、温州方面から伝わったとされ、この地域の文化的独立性が高まるにつれ独特の地方劇として発展していく。莆仙人の演劇好きは明代には定着していて、清中期から清末にかけては150以上の莆仙戲の劇団があったという⁴⁾。

3) 潘宏立 同上書 第4章第1節「宗族組織の再結成」参照。この節の「国際的ネットワーク」(264～272頁)に、華僑との連携によって宗族組織が再興した事例についての詳しい記述がある。

4) 陳雷・劉湘如・林瑞武 『福建地方戲劇』 23頁

辛亥革命以降、宗族や宗教信仰などといった演劇活動を維持する社会的基盤と風潮は衰退し、人民共和国成立以降は決定的な逆風期に入る。文革期には伝統的な演劇活動は停止させられ、多くの劇本も失われ、劇団も激減した。かろうじて東南アジアに赴いた華僑によって伝えられた莆仙戯に、上演形式や演目など古風を残すのみという時期であった。文革終息後には宗族は復興の機運が起こり廟や祠堂も改修され、それと連動して戯台も再建され莆仙戯の上演、すなわち廟戯も復活してきた。

廟戯は宗族の祖先を祀る祠堂の前でも行われるが、道観や神廟、つまり町や村にある道教の宗教施設の戯台でも盛んに行われる。莆田では宗族だけが復興するのではなく、道教や仏教などの宗教信仰も同じように活動が盛んになり、建築物の再建とともに祭祀や儀礼も復活し、その一環として演劇も復興してきている。いわば宗族・信仰・演劇がセットになって復興し、一つの全体的な運動として人々を動かしているように見える。ところが福建沿海部の他地域では、伝統文化の復興という観点からは、宗族と信仰の連動は強いものがあるが、演劇の復興は莆田ほど顕著ではなく連動も弱いようである。言い換えれば、莆仙人の意識の中では演劇が伝統文化の中核の部分に位置づけられているのではないかということである。莆仙戯の復興について観察していくと、莆仙人はなぜそこまで演劇にこだわるのか、という問いにつきあたる。これには様々な理由が考えられ、その中に伝統文化を維持・継承してきた莆仙人の智慧のようなものが見いだされるだろうが、ここではまず現状を示しておきたい。

職業劇団の数についていえばこの数年で非常な増加が見られ、100団体を超えるまでに復活している⁵⁾。これは莆仙地区の人口と面積を考えると、異常に大きい数字である。この数字は清末の150という数字には及ばないが、他地域の地方劇の事情と比べると格段に多く、莆仙地区の総人口が約300万人であることからすると、この地区の演劇活動は一つの「産業」として見ることもできよう。劇団の数や上演回数に関しては、莆仙戯は復興期にあるといえる。

莆田地区における廟戯上演の特徴は、祭祀演劇の形態が維持されていることにある。まず上演の本来の目的として劇を神（あるいは祖先）に奉獻することが意識され、都市の劇場で娯楽として興行される演劇（典型としては今日の京劇など）とは対照的である。上演の費用は、出資者が全額を寄進し観客からは金銭を取らないという伝統的な形式も踏襲している。（野外劇なので観劇料を徴収しにくいということもあろうが、建前としては神に演劇を献納することが強調され

5) 2002年8月、筆者の調査による。写真5「劇団名簿」にも説明してあるが、ある戯館では100団体が登録されていて、市の文化館では118団体の登録が確認された。いま仮に、劇団の数から演劇関連で生計をたてている人数を推計すると、5000人前後になる。1劇団は30人から40人の役者、演奏担当、道具係などから構成されているという。平均35人として、約100劇団で3500人。これに戯館という興行幹旋会社や衣装・道具の製造や販売など関連産業に従事するものが、数百から千人前後に及ぶと思われるので、上記の数字になる。これについては、今後正確な調査をするつもりである。

る。)

しかし今日の莆仙戯は、清以前の記録や東南アジアに伝承されているものと比べると、演目や上演時間などかなり衰弱の方向に変化している部分もある⁶⁾。中国演劇史の研究者には、農村に残る祭祀演劇はまもなく消滅しようとしているものとして論じられることもある⁷⁾。

莆仙戯の現状が、本質的な部分での復興につながるのか、単に一過性の郷愁の盛り上がりなのか今は断定しかねる。また莆仙戯とそれを支える文化的伝統が、中国全体から見るときわめて特殊なものなのか、ある程度普遍的な精神構造として認められるのかについても、判断の材料が少ない。莆仙戯の現状がどのように位置づけられるかは、今後の展開を十分調査してからの作業になり、歴史的な比較と検討は今後の重要な課題となるだろう。本論ではまず莆仙戯復興という現状を提示し、より具体的な調査と考察の端緒としたい。

莆仙戯の上演と受容

実際に莆仙戯がどのように上演され受容されているかを簡単に紹介する。

筆者は1995年以来数回、莆田地区で莆仙戯の上演を観察してきた。初めは演劇そもそもへの関心からではなく、仏寺や道観等の調査のときに偶然見かけたという程度の関わり方であった。ところが、莆田の廟戯は年を追うごとに活発化していることが他の地域と大きく違うことに関心を持ち、意識的に演劇を観察することにつとめた。

以下は、主に2001年1月と2002年8～9月の調査に基づく、莆仙戯の上演に関する紹介である。(準備が不足していて、全体の雰囲気や印象が中心の予備調査の段階である。今後はどこに焦点を絞ってデータや資料を収集するか方針と計画を定め、本格的な調査を始める予定。)

莆仙戯の音楽や劇目の内容自体が古式を残し貴重な文化遺産であることは、多くの演劇史研究者が述べてきたところだが、今日でも上演形態は独特のものである。実際にその場の雰囲気に

6) たとえば莆仙戯では、目連戯はほとんど上演されず、3昼夜連続という上演も一般ではなくなっている。伝統的な祭祀演劇については、田仲一成氏がその膨大な調査をふまえて『中国演劇史』にまとめている。この書は、中国における演劇の発生から説き起こし各時代の変質や展開を跡づけ東南アジアの華人世界の演劇にまで論じていて、多く教えられる所がある。

7) 同上書の最終章「結語 中国演劇の現段階」に、郷村の祭祀演劇は衰退の際で残存しているものとして描かれている。「かくして、中国演劇の現段階は、すでに都市の戯園を中心とした近代化の方向に赴いているが、中国大陸の郷村には、まだ祭祀演劇の伝統が残っており、そこでは発生期以来の郷村祭祀演劇の二大潮流である英雄劇と冤魂劇への郷愁も生きている。最近、政府の演劇政策が許容する範囲では、祭祀演劇の核心である目連戯や儺戯も、不完全ではあるが、部分的に復活上演されることがある。これらも文化遺産として保護されるか否かは、不明であるが、海外の祭祀演劇を含めて、今後、暫くの生命を保ち続けるものと予想される。」(433～434頁)

身を置くと、莆田人ではないのに懐かしさのようなものを感じる。廟戲は野外で上演され、誰もが自由に見ることができる。観客は気取らず和気藹々とした雰囲気の中で観劇を楽しんでいる。北京や汕頭の劇場で観劇するのは全く異なる感覚である。この古風を残す上演形態自体も、莆田の文化や社会構造と密接に関わりながら形成されてきたものだということが感じられる。

莆田ではこの十数年来、文革期に破壊された寺廟や祠堂が修築・再建の傾向にある。最近五年間はかなり小さな廟宇にまで改修が及んだ。それに伴い戯台もほとんど新築されている。閩南の他地域でも廟宇の復興は盛んだが、戯台の新調はこれほど盛んではない。残念なことに木製であったものはコンクリート製に変わっている。写真2の戯台もコンクリート製。戯台は道教の廟や祠堂の正面もしくは側面にあり、華やかな装飾の屋根がついている。その前には観客席となる広場があり、百人前後から数百人の観客を収容できる。(小学校の校庭かやや狭いくらいの、コンクリート敷きが多い。)

主催者側で前列に数十客の椅子を用意するが、ほとんどの観客は自前の椅子を持参する。座って最後まで見るのは、老人がほとんどで女性が多い。通りがかりの者や若者などは立ち見になる。幼児はかなりいるが、中学生以上はほとんど見ない。しかし最近では、盛り場に近い大きな廟では中青年の観客も増加しているようである。

観客は200人から400人は集まり、多くの観客は最後まで熱心に見続ける。初めと終わりの挨拶や拍手はない。劇の初めと終わりには爆竹が鳴らされる。最後のクライマックスを見切ると、幕が下りていないのに我先に帰り出す。もちろんカーテンコールのような「儀式」もない。

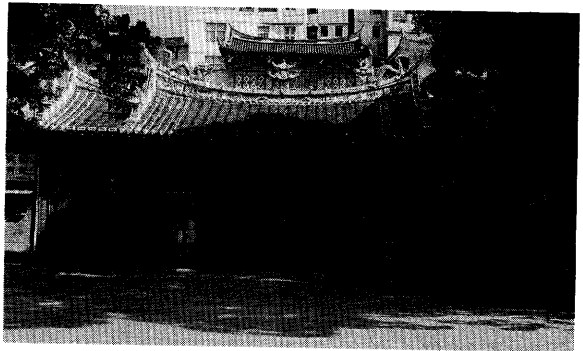


写真1：莆田市涵江区的城隍廟。この城隍廟は地元では鯉江廟と呼ばれ、近年、新しい戯台が新築された。

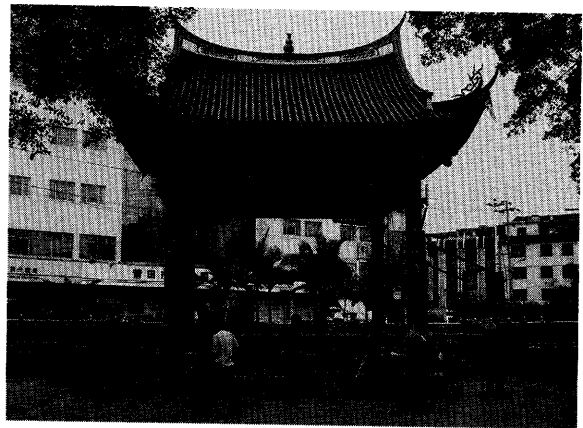


写真2：鯉江廟の戯台。この日も廟戲があり、昼過ぎから上演に備えて椅子が設置されている。

廟戲は本来、神に見せるものであるから、見る人間の多寡は気にしない。雨が降って観客が少なくても演じる。多くの場合は、廟の中では演劇と同時進行で儀礼が行われている。

かつては廟の例祭や神々の誕生日等に行われてきたものだが、今日ではそれ以外の理由でも上

演されている。例えば、弟子一同が長老の誕生日を祝賀するためや、結婚披露のためでも上演がありうる。



写真3：戲台に貼り出されている当日の出資者の名前。同時に演目も示されることもある。

「今天 日場：李氏 夜場：胡金宝 答謝」とある。

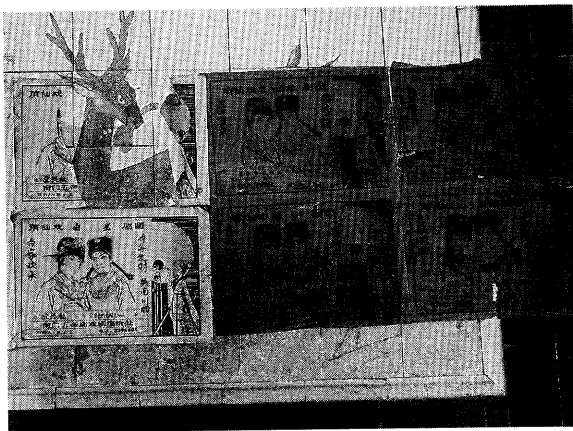


写真4：劇の予告。統一様式の赤い紙に、どの劇団が、いつ、どこで公演するかという最低必要限度の情報が書かれている。廟や祠堂の付近に貼ってある。宣伝には特に熱心ではない。（観客が多くて劇団の収入は変わらないためか。）

これは大変な名誉である。

廟戲は、職業劇団によって上演される。一つの劇団には役者が10人～20人おり、他に楽団や道具方などを入れると30人以上になる。莆仙地区には2002年8月現在では、100前後の劇団が

上演は昼と夜の二場でそれぞれ2時間から3時間かかる。昼の部は1時頃から、夜の部は7時頃から始まる。演目は異なり、夜の方がメインで観客も多い。

興行の幹旋を担当する組織として戲館がある。戲館は、出資者と劇団の仲介、および公演の調整やトラブル収拾が主な仕事である。演劇の上演を望む者は、戲館を通して劇団に依頼するシステムが定着している。神事はもちろん、金銭と場所さえあれば個人的な理由でも上演が可能である。莆田の中心部だけで少なくとも3箇所の戲館を確認した。そのうち、聞き取りを行った「南門戲館」は開業間もない戲館だったが5・6名のスタッフが常駐し繁盛していた。戲館の多さも近年の莆仙戲の隆盛を物語るものである。

費用は一場について2000元前後。個人あるいは集団が負担し、一般の観客からは料金は徴収しない。2000元は、当地の平均月収の3か月分ほどである。献演者（出資者）はその名前を戲台の脇に掲示され、

戯館に登録されている。

中学校卒業程度で演劇の道に入る場合が多い。役者の給料には一定の基準はないが、若い役者でも月収1300元という例があるので、決して生活は貧困ではない。

アマチュアの劇団もあり、専業の役者に指導を受けたりする。

文革前は5200余本の台本があったが、文革中に多くが焼却され、現存するのは800本ほどで、莆田市芸術研究所に保管されている。

演目については、清末からすでに「忠義節孝」を称揚する題材が多かったとされるが、今でも「孝」は最も重要なテーマである。苦難のすえ科挙に合格し大団円に至るといった題材も好まれる。しかし好みの変化は激しいようで、例えば、莆仙戯の代表的な劇目であった「目連戯」は人気がなく、最近ほとんど上演されなくなってしまった。

調査の対象と方法

以上のような全体像をふまえ、今後は現地調査を通じ、莆仙人の演劇に関する意識を様々な角度から捉えていきたい。それには劇団・戯館・行政と廟管理者（或いは宗族代表）や観客に聞き取り調査を行い、また現状の活動を記録していくことになる。

本質的には、莆仙人はなぜ演劇を好むのか、なぜこれまで維持してきたのか、なぜ維持していくべきと考えるのか（或いは考えないのか）という問いが主題であるが、それを明らかにするためには、現場の状況をふまえた様々な具体的な調査と質問の積み重ねが必要となる。

文献資料の収集や在地の研究者との交流は第一に重要であるが、それに加えて現場の演員や観客などへの聞き取り調査もぜひ行ふべきと考える。

上述の廟戯の精神的意義についての質問の他にも、解放前の上演形式がどのようなものであったか、劇目では何が好まれ何が廃れていったかについて、記憶のある年代が存命のうちに調査する必要がある。なぜそういった変化が起こったのか、全体の傾向から背後にどのような社会の変容があるのかなどの分析が可能になるだろう。

また、廟戯によって生計をたてたり資金提供をする人々の意識に迫り、実際の金銭の流

莆田第一	莆田第二	莆田第三	莆田第四	莆田第五	莆田第六	莆田第七	莆田第八	莆田第九	莆田第十
莆田第十一	莆田第十二	莆田第十三	莆田第十四	莆田第十五	莆田第十六	莆田第十七	莆田第十八	莆田第十九	莆田第二十
莆田第二十一	莆田第二十二	莆田第二十三	莆田第二十四	莆田第二十五	莆田第二十六	莆田第二十七	莆田第二十八	莆田第二十九	莆田第三十
莆田第三十一	莆田第三十二	莆田第三十三	莆田第三十四	莆田第三十五	莆田第三十六	莆田第三十七	莆田第三十八	莆田第三十九	莆田第四十
莆田第四十一	莆田第四十二	莆田第四十三	莆田第四十四	莆田第四十五	莆田第四十六	莆田第四十七	莆田第四十八	莆田第四十九	莆田第五十
莆田第五十一	莆田第五十二	莆田第五十三	莆田第五十四	莆田第五十五	莆田第五十六	莆田第五十七	莆田第五十八	莆田第五十九	莆田第六十
莆田第六十一	莆田第六十二	莆田第六十三	莆田第六十四	莆田第六十五	莆田第六十六	莆田第六十七	莆田第六十八	莆田第六十九	莆田第七十
莆田第七十一	莆田第七十二	莆田第七十三	莆田第七十四	莆田第七十五	莆田第七十六	莆田第七十七	莆田第七十八	莆田第七十九	莆田第八十
莆田第八十一	莆田第八十二	莆田第八十三	莆田第八十四	莆田第八十五	莆田第八十六	莆田第八十七	莆田第八十八	莆田第八十九	莆田第九十
莆田第九十一	莆田第九十二	莆田第九十三	莆田第九十四	莆田第九十五	莆田第九十六	莆田第九十七	莆田第九十八	莆田第九十九	莆田第一百

写真5：劇団名簿。南門戯館にて。ここには戯館に登録している100団体の名前が書いてあるが、市の文化館で名簿には118団体の登録があった。劇団数がこのように多くなったのはこの一・二年のことで、今はまだ増加の傾向にあるという。

れ、莆仙戯の経済的側面についても調査・記録する必要がある。劇団の活動に対する行政の関与については、現状では登録や管理はするがあまり干渉はせず、相対的に放任政策に近いように伺えるが、これは地域社会や宗族、宗教活動と連動する部分もあり、実際の関わりについても詳しく調べる必要があろう。

当然、どこで何がどのように演じられたか、という基礎的なデータも蓄積していくことになる。このように見てくるとこれらの調査は、個人で行うよりは複数の人間が組織的に行うのが相応しい性質のものである。端緒は個人で切り開くべきだが、いずれ集団的な調査による総合的研究をめざして展開していきたい。

おわりに―莆仙戯の変容と社会的機能

莆田の人々は演劇の上演によって何を確認しようとするのか。ここで今後の調査のための見取り図を作るのに必要な作業仮説を立ててみたい。

宗族が内に向かって結束するために演劇が用いられるのは、古来、他の地域でも行われてきたことである。たとえば、潘氏の報告にある蔡一族の場合は、祖先祭祀の際に劇の上演がなされているが、構成員は祖先とともに観劇することで宗族の一体感を確認ためのものである。もちろん、莆仙地域でもそのような目的で行われる演劇上演はあるだろう。

ところが莆田地区において、都市部の中心にある大きな廟で劇が上演されるとき、名目は神々の誕生の祝賀だったり施餓鬼供養であったりするが、劇目は神事や祭日と直接関連のないものが多い。この現象を、共同体の祭祀に関わる演劇から世俗の娯楽演劇への転化、と考えることは一見分かりやすそうだが、筆者は全面的には賛成できない。

現在の多くの莆仙戯はその中間の形態に位置しているのではないか。神前で行われる劇に出資することは、神を敬うのみにとどまらず、不特定の人々（といっても血縁ではないが同郷の仲間）にも観劇の機会を提供することである。この行為は出資者の意識の中では、一種の善行というか広い意味での慈善的行為になるという自負があろう。演劇には娯楽の要素もあるが、啓蒙の効果もある。莆仙戯で「孝」をテーマにする劇が多いのは、演劇は完全な娯楽ではなく、道徳・啓蒙的な要素も含むべきだという思想が反映しているのではないだろうか。

宗族の活動はもちろん、莆田の宗教は民間宗教（三一教に典型的に現れるが）に至るまで、シンクレティズムの様相を呈するが中心には儒教が位置し、「孝」の実践に収束していく。演劇上演も広い意味では「孝」の秩序を実現するための一手段と捉えられる。

一方で商業を尊ぶ伝統のある莆田の人々は、より広いネットワークを構築するために、それぞれの宗族を越えた地域の紐帯を強化するには、道徳・啓蒙的な要素を含む演劇の上演が有効だということを発見したのであろう。莆田人の気風である「孝」や儒教の重視は、上からの教化

や体制維持のための押しつけではなく、それらを生き残りのための戦略に取り込み、同郷の人々や華僑との関係を維持するための装置として機能してきたと解釈することもできる。

以上、莆田で演劇が盛んになった理由について、現在考えられる仮説を述べてみた。

莆仙戯は現在も変容を続けている。劇団数や公演回数は多くなっているが、内容や技術はどうなっていくのか。高齢化に伴い出資者の意識も観客の意識も変化していくだろう。しかし、現在を1000年の歴史をもつ莆仙戯の転換点の一つと考えれば、いずれ新たな創造的局面を見せる可能性もある。そこには宗族や儒教といった漢族の伝統文化を、時代の変化にあわせて変化させることで、構成員の生存を可能にしてきた生命力が反映しているであろう。



写真6：莆田市東部にある江口镇で最も大きい道観、「東嶽観」の夜の廟戲。2002年8月21日撮影。演目は「千古恨」（「楊家将演義」中の「四郎探母」の話）。右手は穆桂英。揭示によれば、この日は注生大帝という神の誕生日（旧暦七月一三日）でそれを祝う名目で廟戲が行われた。

参考文献

- | | | | |
|------------|-------------------|-----------|------|
| 陳雷・劉湘如・林瑞武 | 『福建地方戲劇』 | 福建人民文学出版社 | 1997 |
| 田仲一成 | 『中国演劇史』 | 東京大学出版会 | 2001 |
| 潘宏立 | 『現代東南中国における漢族の社会』 | 風響社 | 2002 |